

「速水女塾」からの岸田の喜劇 一

——岸田国士論④——

松尾忠雄

一 問題提起

戦後の岸田の戯曲を取り上げる。

「速水女塾」 第一稿 昭和二三年 雑誌「中央公論」七月号

第二稿 同年 単行本 中央公論社刊

「女人湯仰」 昭和二四年 雑誌「文学界」九月号 「道遠から

ん」 創元社昭和二五年刊所収

「権茸と雄辯」 昭和二五年 雑誌「世界」一月号 同

「道遠からん」 昭和二五年 雑誌「人間」六月号 同

「カライ博士の臨終」 昭和二六年 雑誌「世界」一月号

岸田の戦後の戯曲はこの五作品ですべてである。手元の資料では、岸田の戦前の最後の作品は、昭和十一年、雑誌「改造」三月号に発表した「歳月」ということになっている。しかし、

この後に「風俗時評」という作品が来るはずである。昭和二二年に戯曲集「風俗時評」が出版されている。或いは他にも漏れている作品があるかもしれない。渡辺一民氏の「岸田国士論 悲劇と喜劇」（岩波書店刊）によれば、戦時中、昭和一八（一九四三）年に日本移動演劇連盟のために「かへらじ」という作品を書いている。雑誌「中央公論」に掲載されている。そして、戦後の作品が前記の五作品である。

その後、岸田は、「みずからの演出になるゴリキリーの「どん底」の公演を翌日に控えた一九五四年三月四日、神田一ツ橋講堂で舞台稽古の指導中、脳動脈硬化症を再発して倒れ、ただちに東大病院沖中内科に運びこまれたが、翌五日午前六時三十二分永眠した」（渡辺一民 「岸田国士論―悲劇と喜劇―」岩波書

店刊)、昭和二九年である。

この五作品は、いずれも「喜劇」と銘打たれた作品であるが、「連水女塾」と後の四作品とで、「喜劇」と岸田が言うその「喜劇」の質に変化があるように、筆者には思えてならない。岸田にとって「喜劇」とは何なのか。なぜ、その「喜劇」の質を変えたのか。それを検証するのが、この論文の目的である。

一一二 第二次大戦末期から死に至るまでの岸田国士

その就任の年月は、目下不明であるが、昭和一七年七月に辞任した「大政翼賛会文化部長」にまつわる岸田及び周辺の、いろいろな時期におけるいろいろな人の言説を中心に、渡辺一民氏の前記の著作によりつつ、岸田の考え及び人物等について略述しておきたい。

小学館の「日本国語大辞典」によれば、「大政翼賛会」とは、「昭和一五（一九四〇）年、第二次近衛内閣が新体制運動推進のもとに設立した戦時下国民統制の組織」とある。この後、日本は一気に第二次世界大戦に突入する。昭和一六年四月からは、「小学校」が姿を消し、代わって臨戦体制の「国民学校」がスタートした。そして、その昭和一六年二月八日に、日本は第二次世界大戦に突入した。それだけに、岸田の「大政翼賛会文

化部長」について、戦前、戦後を通じて、岸田は勿論、いろいろな立場の人たちがいろいろな発言をしている。

以下は、渡辺一民氏の「岸田国士論 悲劇と喜劇」による。岸田自身、その文化部長就任をどう考えていたのか。一九五四（昭和三五）年三月の岸田の告別式で日本文芸協会代表として弔辞を述べた菅原卓は、その中で「われわれの痛恨をよぶものは、君が、われわれの懇望を容れ、衆望に押されて、戦時態勢の斜面をひた走る国勢の食い止め役として、あの大政翼賛会の文化部長に就かれ、就かしめられたことであります。心ある者は、君の就任によって、新しい段階の展開を期待し、何かホッととして、あの不安の中に、背空をのぞいた気持ちでありました」と述べている。中島健蔵氏は「バリケードとして身をささげ、思想の自由を少しでも弾圧から守ろうとした一つの悲劇」（「岸田国士の生涯」と述べている。岸田が大政翼賛会文化部長に就任した彼自身の意図及び周囲の期待が語られている。当時翼賛会文化部にいた酒井三郎氏は、その著「昭和研究会」の中で「文化部長の岸田は、内閣情報局にいた頑迷な軍人連中や翼賛会上層部に対して、終始立派であった。文化の自衛と側衛的任務のために、非常な決意をもって文化部の仕事にあたった。それだけに、情報部から圧力をかけられ、評判は悪かった

し、内部の支援はあまりなかった。それで岸田は、ひそかに「もはやこれまで」と辞意を固めたようだった」と述べている。文化部長岸田の姿勢、及び周囲の事態である。敗戦の年の一月、その言葉を信州松本で岸田自身の口から聞いた林克也は、岸田自身の言葉を「新しい文化を生み出すために、日本の改良が必要だと思った。それは国民の中から成長するが、上から指導することも一つの方法であり、手段と思った。これが根本的にま

ちがっていると自覚しましてね、……私たちは文化の再建と国民運動を考えて参加したのですが、結果は官僚勢力の拡張だった。官僚に文化や芸術は判らない、というより、彼らは文化という名で批判を抑制しようとした。文化統制が目的だった」(「敗戦期の岸田国土」と述べている。そして、岸田自身「どうも、言葉が通じない感じがする」(中島健蔵「岸田国土君を偲ぶ」)と文化部長として働いて来た場への痛切な思いを述べている。

また、古山高麗蔵氏は「ある行為や言葉を奨励したり、制限したり、強制したりすることは、あれほどはつきり、批判し、危険を冒して発言までしている岸田国土だが、背を向けたり、かわしたりしないのだ。是正し、矯正し、理解させようとする。あの時代にそれをやれば、くたくた、ぼろぼろに疲れてしまう。あの戦争自体が歪んだものであったのだから、戦争を肯定して、

歪んだ愛国や報国を矯正しようとするのは、撞着である。でなければ、至難である。……撞着の中で岸田国土は疲れ果ててわが家に帰って来た」(「岸田国土と私」と述べている。岸田の姿勢・考え方について、いろいろ批判することは出来る。しかし、こんな岸田を考えれば、悲痛な思いに駆られる。

敗戦後、岸田は公職追放になった。当然、大政翼賛会文化部長であった岸田に非難の論調が相次いだ。その風潮に対して、豊島与志雄は「わが国の文化人と呼ばれる連中の多くは、一ばん骨の折るる、一ばん割に合わない仕事に自分から手を出さず、それを他人におしつけて、しかも、その困難な仕事を引き受けてくれた人に決して最後まで応援しない。それどころかすぐに難くせをつける。岸田先生の場合もそうであった」(「理想主義の大きな夢」と述べていることを付け加えておきたい。

二 「速水女塾」の岸田の喜劇

二一 「速水女塾」の喜劇の構図

雑誌「せりふの時代」(日本劇作家協会編集・小学館発行、一九九九年夏号)で井上ひさしは女子学生相手に「コメディレックス」をするという形をとった喜劇論の中で、「モリエール

のすごいところは、人物の彫りを深くして、類型から抜け出したことです。類型の中に人間の感情を溢れるように盛り込んだという言い方もできるかもしれませんね。さらに、時代の風俗や浅慕な流行を鋭く深く観察して、その欠陥を登場人物の姿の上に映し出して批判し、笑いのめすという方法を創り出した。

……チエホフは、大きな夢を抱いた人間が、結局は、日常の些事に追われているうちに、いつしか夢は実現されずに終わってしまうという、人間共通の悲喜劇を、舞台上にきっちりと提出した人ですね。だからチエホフ劇はおかしいけれど哀しい。」と云っている。

「悲劇」及び「喜劇」ということばを、演劇のジャンルを表現することばと限定してみても、そのことばの定義に確たる固定したものはない。むしろ当然であろう。

また、岸田は「ファルス(笑劇)」を問題にして論じ、自らも「ファルス」を書いている。

一九二八(昭和四)年に発表した「ファルスの近代性」という小論の中で、「井汲清治君の説によると、悲劇は貴族的、喜劇は中産階級的、そしてファルスは民衆的であるとのことである。この観方も面白いし、ほぼ同感であるが、私が演劇の様式としてのこのファルスに興味をもつのは、必ずしも、さういふ階

級的」な意義によるものではない。」と断っておいて、「それから「笑劇的」な要素とはどんなものかといへば、それは、先づ第一に、「道化(ビュルレスイ)」である。「道化味」の本體は「おどけ」と「さつくばらん」と「きはどき」である。」(『現代演劇論—ファルスの近代性』白水社)と述べている。

戦前の岸田の作品の中で、ファルスと云えるものには、アトランダムの諷刺は免れないが、以下の作品が考えられる。

命を弄ぶ男ふたり

一九二四(大正十四)年

麵包屋文六の思案

一九二五(大正十五)年

屋上庭園

同年

百三十二番地の貸家

一九二七(昭和二)年

犬は鎖に繋ぐべからず

一九三〇(昭和五)年

かんしゃく玉

一九三一(昭和六)年

世帯休業

一九三二(昭和七)年

運を主義にまかす男

同年

雅俗貧困譜

一九三三(昭和八)年

試みに、上記の各記述、特にモリエールとチエホフの喜劇を念頭に置きつつ「速水女塾」の喜劇の構図を簡単に述べるならば「寄ってたかって持ち上げておいて、引きずり下ろす」構図と云えるのではなからうか。但し、付帯条件をつけなければな

らない。引きずり下ろされた責任の一端は、引きずり下ろされた本人にあるということである。このことは、当然岸田の計算に入っていた。岸田の作劇術（下ラマツルギー）である。

以下、具体的に検証していく。まずこの戯曲の梗概を述べておく。

東京都心に遠い某区にある私立高等女学校（乃至は女学校）

「連水女塾」は、息子連水思文の口を借れば、元代議士である父連水秀策の「酔興とおふくろの名誉欲で、でっちあげた、インチキ学校」ということになるが、よくある普通の私立高等女学校乃至は女学校である。

一九四五（昭和二〇）年八月一日、敗戦、二八日、連合軍総司令部を横浜に設置、三〇日には、連合国総司令官マッカーサー元帥が厚木飛行場に到着、九月二日、日本、降伏文書に調印。二一年、二二年、二三年、世の中は逆転して行った。旧勢力は世の中からの引退を余儀なくされ、代わって新勢力が台頭して来る。いろいろな職場において、公職追放の憂き目に遭った人は多い。連水秀策も、応は第一線から身を引かねばならぬ。連水女塾塾長連水桃子も、このまま現職に止まろうとすれば、公職追放同等の身分に追いやられるはずである。連水女塾も新旧交代の必要に迫られている。しかし、息子連水思文は

その意志もないし若すぎるし、その人材でもない。

かくして、「寄つてたかつて持ち上げ」られ、やがては引きずり下ろされる主人公、連水家の長女、八坂登志子が登場する。登志子は、男爵八坂家の、戦前は満州国官吏であった八坂直光の妻として満州国に滞在し、恐らくは二一年に、相馬佐によって助けられて祖国日本に引き上げていた。ここにもう一人の主人公相馬佐が登場して来る。登志子は、秀策と桃子に口説かれても、後を継いで塾長になることを嫌がっていた。その登志子に塾長となることを承諾、納得させたのは、相馬である。登志子はそんな力に支えられて新塾長に就任した。

岸田は、相馬に中途半端な役割を負わせている。秀策が桃子の後見の役割を担っていたのと同じように後見の役割を担うことになるのだが、秀策のせりふによれば、

この建物は土地ぐるみ学校へ寄附しませう。どうぞご利用にならうとこ勝手だ。但し、これをそつくりいまずぐ現金に代へることは待つていただきたい。つまり、連水女塾の財産は、獨立会計にして経営の自由は認めはしますが、依然としてわしの名義になつてゐるわけです。わしは飽くまで校主です。学校の存立を危うくするやうな経営方針には断乎として反対します。（以下、本文引用はすべて中央公

論社昭和二三年刊「連水女塾」による)

というわけである。相馬のことはよれば「委託経営」である。

岸田は、第二幕で学校に火災を発生させ、その大部分を焼失させてしまう。その火災が、秀策を追い詰め、相馬の委託経営を苦しめて行く。そして岸田は、相馬を戦前、ハルピンのホテルのマネジャーをやっていた人物とし、日本に帰国して早々に大きな会社を作って事業を始めた人物と設定している。得体の知れない一面をちらつかせる人物という設定でもある。登志子が抑留中の夫を満州かソ連に残してきているように、相馬も妻(現地妻)を満州に残して帰国しているのである。

こんな人物相馬が、連水女塾の経営にかかわってきたのはなぜか。相馬の意図は何なのか。相馬と登志子のせりふに見てみる。

登志子 ……(略)……あなた以外の誰にも、さういふことを相談したくないわ。

相馬 そいつは光栄の至りだけれども、僕はまだ、あなたからさういつてもらふまでの資格は与へられてるないと思ふが……。

登志子 あら、それどういふ意味?公然と二人きりでゐられ

るお友達ちや、どうしていけないの?

相馬 公然とね。なるほど、それもやむを得ずだ。……(以下略)

そして、更に詰め寄って行く。

相馬 (椅子に登志子の方へ引きよせる) なるやうになるには、なるやうにするものがなければね。今日、帰りに熱海へ寄りませうか?

この相馬の登志子への思いが、相馬を連水女塾の経営に関らせそして登志子を「引きずり下ろす」契機となる。岸田は、登志子に到底、相馬の思いを受け入れることが出来ないようにドラマを進めていく。登志子を引きずり下ろす役割を果たす主なもの、学校の火災という客観的条件と、相馬の打算と隣合わせの愛情である。しかし、引きずり下ろされた最大の契機乃至は責任は、登志子自身の行為である。相馬は、自分の力ではどうにもならない学校の復旧資金を融通してもらうために松沢という人物に会ってくれと頼む。それを登志子は、激しく拒否をする。

登志子 だからよ。あたしさういふこといやなのよ。けからはしいのよ。あなたのいふことをそのまま受けとれば、まるであたしは結婚同然ぢやないの。

相馬 そこまでのことはいはなかつたつもりだがね。女の方が当たりがやはらかでいいつていつただけだ。

登志子 それごらんさい。ううん。それだけぢやない。どうかした目付きでちよつとなんとかしてみせろなんていつぢやないの。

相馬は、

相馬 (起ちあがり) 僕は学校から手を引かうか？

と脅迫する。そして相馬は、登志子の人格の尊厳を傷つけるひどい言辞を吐く。切羽詰まった登志子は激怒し、

登志子 (起たちあがり、地団太をふみながら) 出ていかないの、あんた。

相馬、固い微笑を浮かべながら、前と同じ足どりで、

部屋を出て行く。

登志子 (椅子にぐつたりと寄りかかり) これで、もうなにもかもおしまひかしら……。

登志子は、最後は自分の意志というより感情に駆られて幕を引いてしまう。つまり、登志子を引きずり下ろした最後のものは、登志子自身である。「寄つてたかつて持ち上げておいて、今度は自分自身も荷担して引きずり下ろしてしまふ」喜劇と云うべきか。

「連水女塾」は、井上ひさしの喜劇論の中のモリエールに関する部分から引用すれば「時代の風俗や浅慕な流行を鋭く観察して、その欠陥を登場人物の上に映し出して批判し、笑いのめす」という記述に当てはまるのであろうか。しかし、それにしては、岸田は描き出す人物・対象に距離を置かなさすぎる。モリエールとは、この点大いに異なる。ではチエホフの喜劇はどうか。同じく井上ひさしの喜劇論の、チエホフに関する部分から引用すれば「大きな夢を抱いた人間が、結局は、日常の些事に追われているうちに、いつしか夢は実現されずに終わってしまふ」という人間共通の悲喜劇……おかしいけれど哀しい」喜劇であると、「連水女塾」は云えそうである。岸田は、チエホフ

のドラマ・ツルギーを意識していたのであろうか。自らフランスに留学し、フランスの演劇や文学には造詣も深く翻訳もあるが、岸田がチエホフに言及した文章、資料は筆者には今のところ見当たらない。即断し難いが、中世の偉大な喜劇作家モリエールよりは、ロシアの近代の偉大な劇作家チエホフに近いものを「速水女塾」のドラマ・ツルギーは持っていると言ってもよいのか。そう言い切ってしまうのは不可であらう。岸田独自の喜劇のドラマツルギーがあるものと考えないと説明し難い部分がある。従って、モリエールやチエホフとの比較で「速水女塾」を考えてきたが、岸田自身「速水女塾 四幕と声のみの一場よりなる喜劇」、つまりこのドラマの「喜劇」をどう考えていたのか、考えてみる必要性はあろう。岸田にとって「喜劇」とは何なのか。

まず、幕切れの部分の、岸田の意図とそこに表現されているものについて考えてみたい。幕切れはこうなっている。

登志子 (椅子にくつたりと寄りかかり) これで、もうなにもかもおしまひかしら……。

この時、どこからか、桃子の声がある。

桃子の声 登志子、登志子や……。

登志子 (いぶかしげに、あたりを見廻し) お母さま……。

桃子の声 なにもかもおしまひなのはね、わたしただよ。お前はまた、はじめたばかりぢやないか。

この時、また、思文の声がある。

思文 姉さん……姉さん。

登志子 (その声を探す) 思文さん……。

思文 姉さん……。姉さんは、ただ、二つの時代の間を橋のやうに生きるひとなんだよ。姉さんのあとに僕がいる、

それから、僕が……。

月ノ木の声 あたしもるるわ。

登志子は、耳をすましながら、一旦、眼をつぶるが、

やがて、それらの声の主が、幻のやうに浮かぶ。眼を

静かに見開く。そこで、自ら励ますやうに、淋しく微笑む。

幕

岸田は、この部分を書かずには幕を切れなかったものと思う。では、一体、岸田はこの部分で何を云いたかったのか。思文は、姉さんは「二つの時代の」橋渡しの役割を果たすべき人物であると云っている。昭和二二年、大きく変わろうとしている時代に、二つの時代、葬り去らなければならない「日本の旧体制」

の時代と、民主化される「日本の新体制」の時代の間を橋渡しする知識人の役割といったものを、岸田はどこかで期待していたのだろうか。あるいは、これらのすべてのことは、登志子に生きる力を与えるための、単なる励ましのことはなのであるか。これらのせりふのうち、最も力のあることは、桃子のそれである。このことばには、桃子の今まで生きてきた長い人生の重みを感じられる。ところが、思文と月ノ木の二人は、ドラマの進行する過程で、生き方、考え方を変えている。生きる姿勢に暖味さがつきまとう。登志子への励ましのことはとしては力がない。あるいは、岸田は、そのことをも計算に入れて幕切れの下書きを書いたのか。曰く、

……それらの声の主が、「幻のように」臉に浮かぶ。眼を静かに見開く。そこで、「自ら励ますやうに、淋しく微笑む」

岸田は、どういう計算をしていたのか。あるいは、登志子は自分を励ましてくれるものは、幻でしかないことを知って淋しく笑ったのであろうか、だから、人生はチエホフのいう「喜劇」だというのであろうか、図りかねるが、筆者は一応そうも考えてはいる。

このドラマを観終わった観客は、「ほのぼのとした暖かさ」

を感じ取るだろうか。まさか明るく幕が降りるといふ演出はあり得ないであろう。多分、「そこはかかない物悲しさ」を感じ取るのだろう。岸田は、一体どう幕を下ろしたかったのか。表現として形象化されたもの、つまり上演された場合のリアリティを問題にする。

二二二 形象化されたもののリアリティ

A 人物の設定の問題について考察する前に

「速水女塾」のドラマとしての質を見極めるために、主人公八坂登志子及び相馬佐という人物に形象化されているもののリアリティについて触れて行きたい。

その前に、女学校「速水女塾」というドラマの「場」について触れておく必要がある。戯曲によれば、時、所は、

・昭和二十二年、春から夏にかけて

・東京の都心に遠い某区ならびに沼津海岸

である。

余談だが、岸田が「速水女塾」を書いたのは、主として昭和二三年である。第一稿は、同年の七月号の雑誌「中央公論」に発表している。さらに追っかけるように修正を加えて決定稿を完成し（八月）、十一月には単行本として、同じく中央公論社

から出版している。

昭和二年、全国の多くの都市は、まだ戦時中の空襲で焼失したままであった。東京都区内等大都市の小学校では、低学年の午前と午後の二部授業は珍しくもなかった。雨の降る日は傘を差しての授業もあった。仮設校舎も数多くあった。岸田が、「連水女塾」を「東京の都心に遠い某区」にあることにしたのは、その辺の事情を感じたものであろうか。「連水女塾」の校舎は戦災では焼けていないのである、第二幕で火事を出させるために。

以下述べることは、この作品の根幹にかかわる問題ではない。瑣末事ではあるが、一応触れておく。昭和二年三月三十一日に「教育基本法」、「学校教育法」が施行され、二年四月からは、「国民学校」に代って、「新制小学校」「新制中学校」が発足した。旧制の中学校、高等女学校、女学校は、新制高校に切り替えて、昭和三年に発足することになる。その辺の事情を知る由もない岸田は、当然旧制の高等女学校、乃至は女学校の体制のままの連水女塾を描き出している。

B 人物の設定の問題について
八坂登志子 持ち上げられて引きずり下ろされて

父連水秀策は、元代議士、実業家、母連水桃子の名誉欲に応じて「連水女塾」をつくってやった。母連水桃子は、連水女塾の塾長つまり女学校の校長である。連水家の執事で学校の事務長（岸田は「女塾の幹事」と書いている）でもある平栗高民の発案で、登志子は八坂男爵の令息八坂直光に嫁いでいる。八坂直光は、敗戦までは満州国官吏であった。従って今は、戦犯としてシベリア抑留中の身分のはずである。岸田は旧満州国に残っていることにしているが、現実には、満州、北緯三八度線以北の朝鮮、樺太、千島はソ連軍管区であったので、ソ連軍は、満州国官吏であるならば、戦犯としてシベリアに抑留している。尤もそういう事実は、岸田が「連水女塾」を執筆した当時には、よくは知られていなかった。旧満州からの引揚げは、関東軍、満鉄、日本大使館、関東局、満州国政府、国策会社の関係者という優先順位で実施されたのが現実である。そして、旧満州からの孤児集団の第一次引揚げは、昭和二年九月三日、佐世保港入港であった。樺太からは、同年一月五日、函館港に入港が第一次、シベリアからの引揚げは、同年二月八日、舞鶴港入港であった。登志子は何時引揚げて来たのであろうか。相馬直光に助けられて満州から引揚げて来た。それも夫直光と子供を満州に残して、という設定である。そう設定しなければ、連

水女塾の後を継ぐのは直光になりかねないし、相馬との関係を描くには、夫と子供が満州にいる、それも妻登志子のことを考へながら、ということにしなければ、「引きずり下ろされる」要因の一つが成立しない。相馬の立場から云えば全く異質の表現になるが、登志子の立場で言えば相馬に不倫を誘われ、遂には身を相馬に任せてしまいなから、最後に色仕掛け(?)で学校復旧の資金づくりに協力しろと相馬に強要されて拒否し、「引きずり下ろされる」ドラマは成立しない。

次に、岸田が形成した登志子の人間像について考えてみる。

幕開き直後に、速水家の執事で、速水女塾の事務長でもある平栗高民、続いて教頭の木原基が登場して来る。その木原が、

木原 ……(略) ……ところが僕は、八坂夫人なるものに一度会って、すこし認識を改めた。むろん、教育事業にはずぶの素人だといふことは、話をしてみればすぐにわかる。しかし、驚くべきことには、彼女はなにかをもつてますな。

木原 僕は、速水女塾の更正のために、学識や経験は二の次だと思ふ。思想的立場か? そんなものは看板に過ぎん。

人間ですよ。君、人間的魅力ですよ。……(以下略)

と、平栗相手に喋る。ドラマとしては、最初の理解者である。皮肉なことにこの木原は、その登志子によって首を切られる。「ああいふもつともらしい先生は、あたし苦手なの」と云われて。その後、速水家の面々、このドラマの主役、登志子と主なる脇役たち、速水秀策、速水桃子たちが一斉に登場して来る。その後、遅れて登場してきた弟の思文と二人になって、思文に、塾頭を母から引き継ぐのかと質されて、「あんたが受けないからしょうがない」と応えた後、

登志子 ……(略) ……もともと姉さんの柄ぢやないことぐらゐ知つてるわ。でも、おだてられれば、やれさうな気がするよ。善兄さんだつて、あたしがこんなことしてるの見たら、気が狂つたのかと思ふでせう。あたし、相馬さんがうしろについてくれるから、安心なの。あたしは、お芝居をするだけでいいんだから……。

思文 芝居か。姉さんは正直でいいや。……(以下略)

という。これに続く場面で、どんな学校にしたいかという夢を登志子が語る。それを聞いた思文が、「お話にならないほど甘い夢だ」と決め付ける。二人は本音でしゃべっている。岸田は、

当然計算づくできうたい二人だけの場面を設定した。登志子の人の良さ、無警戒ぶり、無見識ぶりが、ここには表現されている。登志子にとっての悲劇はここから始まっている。登志子にとっての悲劇は観客にとっては喜劇である。

そして、この二人だけの場面の続きで、思文は、相馬という人物への危険性の指摘する。それに対して登志子は、

思文 姉さんはあのひとのおかげで、無事に満州から引揚げて来られたんだつていふけれど、さういふ恩義は、あんまり大きく考へすぎない方がいいよ。「命の親」だなんていふ表現は、僕はきらひだ。

登志子 あら、だつて、それほんとなんですもの。途中の旅行が、女にとって、どんなに危険なものだつたか、経験のないものにはわからないわ。

思文 だからさ、さういふ危険に対して、道づれになつた女性をあくまでかばふなんてことは、男として、あたり前なことさ。姉さんが、そんなことのために、あのひとを必要以上に近づけるんだとしたら、それはをかしいつていふのさ。

登志子 わかつたわ。あたしはただ、夫とも子供とも別れて、

かうしてひとり生きて行くために、ともかく、生きていく力がほしいの。いくらかの希望と、淋しさに堪へる勇氣とがほしいの。誰がいつたいそれを与へてくれるの。

思文 ……………。

登志子 あんたの言ひたいことはよくわかるわ。姉さんのことを心配してくれる気持ちには、ありがたいにはありがたいんだけど、姉さんもすこしは、これで、おとなのつもりよ。

という。「生きていく力がほしいの。いくらかの希望と、淋しさに堪へる勇氣とがほしいの」、このことばも、登志子の本音である。しかも痛切な本音である。昭和二二年、二三年当時、外地からの引揚げ者達の悲惨な現実を、日本にとって当面している大きな国家的な問題であつた。夫と子供を満州に残して引揚げて来ている（と岸田が設定している）登志子の事情は、当時の日本人にとって痛切な自己の問題でもあつたはずである。岸田がこの問題を距離を置いて考えていたとは考えにくい。そして思文が相馬に関して、ここで云っていることも、これまた至極当然のことである。観客にしてみれば、思文は危惧しているが「姉さんも、これで、おとなのつもりよ」という登志子のことばを信じるしかない。そこへ、その相馬が「案内なしでや

つて来ました」と云いつつ登場するというのがドラマ進行の段取りになっている。

登志子の人の良さは、これに続く場面でも出ている。

登志子 さう？なんですか、すこしづつ自信みたいなものがついて来ましたわ。あなたつていふ方は、ほんとにひとを自惚れさせることがお上手ね。

では、次の登志子の発言は何だろう。

相馬 ……(略)……あなたは、あの期間を境として、まったく過去といふものをお忘れになつてよろしい。しかし、それは、貞淑な奥さんには、無理な注文かもしれない。八坂大人は、零下四十度の吹雪の下で、愛妻の夢を見つづけるるでせう。

登志子 そんなことはご想像にまかせますわ。あたくしの頭は、いま、この学校のことについてです。子供のことさへ、どうかすると、一日ちゆう思ひ出さずにあることがあります。

相馬に褒め上げられ、自信をつけてられて、塾長の仕事をやる気になっている。そこで相馬は、過去は忘れろと云い、一方で夫は零下四十度の吹雪の下で登志子のことを思い続けていると云う。相馬にしてみれば、当然の気配りである。岸田は、やがて登志子を追いこんでいく仕掛けをしている。岸田は、どう受けさせるか。「今は学校のことについていい、子供のことさえ一日中思い出さないことがある」と応じた。登志子はどんな人物なのか。暗い思いに浸っている場合ではない、と自らを励ます気持ちであろう。素直な、人の良い人柄が見えてくる。このすぐ後の、

相馬 お子さんは大丈夫、僕が保証します。あの満州人夫婦は神様です。あの一家がなかったら、われわれも、いまかうしてはゐられなかつた筈ですから……。

登志子 人間のわうちつて、ほんとにわからないのですわ。

こういう事例は、事実結構あつたはずである。岸田は、そういう事例を根拠にしてこのせりふを書いたのであろう。それにしても、こんなに簡単に人間を信じてよいものか。それが、登志子の人柄に対する筆者の感想であると同時に、岸田への感想

でもある。勿論、岸田は意図的に、素直で人の良い登志子を描いたのであろう、その登志子を引きずり下ろす喜劇（観客にとっての喜劇）を書くために。

第一幕と第二幕との間に、「第二幕開幕前の声のみの一場面」がある。幕の蔭で登志子が喋るという設定である。登志子は、相馬に渡された原稿で、塾長就任の挨拶の稽古をしている。だがこの原稿、相馬原案登志子修正原稿と思われる。相馬に操られている（助けてもらっている）という側面は否定し難いが、登志子の甘い理想主義的側面も十分に窺える。

第二幕。ここは沼津海岸にある速水女塾の夏季寮。登志子は既に相馬を、桃子に於ける秀策のような存在、委託経営者としての協力者と思いつ込んでしまっている。

登志子 それより、早く、ここをなんとかしてちやうだい。せめて、あたしのゐられる部屋をひとつこしらへてほしいわ。

登志子 全体がこれちや殺風景よ。さうお金をかけなくつても、小ざつぱりした環境を作らなけりや……。

そして、相馬に、この寮に登志子の部屋を作るよりはここの速

水家の別荘へ骨休めに来ればいいではないかと云われて、

登志子 家のものと一緒ぢやいやなの。ひとりつきりであるところかほしいの。

と、わだり、かつ、ただをこねる。さらに相馬に専用の別荘をひとつわだれと言われて、

登志子 それくらゐなら、なにも、学校なんか引受けやしないわ。

とただをこね続ける。岸田にとって、この当時、自立しようとしている新しい女性像とは、こんなものであったのだろうか。

登志子は、この後言葉を続けて、

自分でどこまでできるか試してみたいの。

と云う。これだけ聞けば、自立しようとしている女性の言葉である。そしてこの後に続く登志子の言葉が、先述した、

登志子 ……あなた以外の誰にも、さういふことを相談したくないわ。

になる。その後、登志子にとっては、思いがけなく「あなたからさういつてもらふまでの資格は与えられてゐない」と追られ、さらに、満州からの引揚げて「あぶなつかしいのは、ひとりぢやないんだ。僕も海千山千の男だし、あなたも十九の娘ぢやない。通じるものは通じてゐる」はずと迫る。あなたの危険を守つたのは、それだけのことがあるのだ、というわけである。

登志子 そんなに追ひ詰められるやうな気持ちにさせないでちやうだい。……(以下略)

相馬 (椅子を登志子の方へ引きよせる) なるやうになるには、なるやうにするものがなければね。今日、煽りに熱海へ寄りませうか？

と迫り続ける。この後、連水女塾で火災が発生する。ここ沼津海岸の夏季寮に、それが電話で知らされて来た。桃子、秀策はおろおろし、相馬は相馬の立場と人柄で、それに応じていく。ただ、登志子は、火事発生と知らされてすぐ後に不思議なこと

を言う。相馬の、

相馬 ただかうしてゐて、どうすることもできないといふのは、へんなものだなあ。

という言葉を受けて、

登志子 あの校舎が火の海につつまれてゐるのを想像してらんになれる。あたしは、なにか運命つていふやうなものを考へるわ。運命の大きな意志が働いてゐるやうに思ふの。人間の力でどうにもならないものは、いつか、自然が解決してくれるつていふことだわ。

と云う。突如チエホフの戯曲の人物が登場してきたといった趣きがないでもない。また、戦時中、空襲に遭って焼け出された庶民の、日本人らしい諦念が滲み出ているとも取れる。しかし、学校のことと頭が一杯、外地に残して来た子供のことを思い出さない日もあるという登志子が、今云うべきことばとしては不適切ではあるまいか。岸田は何を考えていたのか。そして、この言葉は、相馬にあっさり否定される。その相馬のことばに反

論すらしない。相馬は、

相馬　しかし、焼けてなくなるのは物質だけだからね。よかれあしかれ、あとにはまだ人間の欲望が残つてゐる。これが減じないかぎり、焼けうせたものは、またもとの形にもどる。運命は人間を殺すのにそんなに手間はかけないさ。

と云う。この場合、これが正論である。しかも相馬の本音も表れていて面白い。或いは岸田は、相馬にこの言葉を云わせるために、登志子にあんなことを喋らせたのであろうか。

次に、二幕の幕切れの登志子のせりふを問題にする。

登志子　（冷然と）さう……それでいいわ。

幕

これはいくら考えてみても二幕全体を背負うような、登志子の全人格をここに賭けたようなせりふではない。桃子と秀策が落ち込んでいる。見かねた登志子が、

登志子　相馬さん、なんとかおつしやつて、父を慰めてやつてくださらない。

それを受けた相馬は、

相馬　（冗談ともまじめともつかぬ調子で）では、ご指名によつて、僭越ながらわたくしがお慰め申し上げますが、学校の火災によつて生じる不都合は、不肖わたくしが、責任をもつて善処いたします。……（中略）……復旧工事には、すぐに着手できるやう、然るべき手続きをとります。この建物の改築と併行して、速水女塾の事業として完全な態勢を整ふのは、さう先のことではないといふことを、みなさんの前で、今日只今、明言いたします。

という。

秀策　（しばらくぼんやりしてゐるが、やがてわれにかへると、つかつか相馬の傍らに歩み寄つて、握手を求める）
ありがたう、相馬君。

という喜びようである。喜びの余り、桃子の立場を顧みない自己中心の発言をして、桃子の面目を傷つけ夫婦喧嘩になる。

桃子 ……(略) ……お前に頼んどくがね、わたしの骨は、絶

対にお父さんとおんなじお墓へ埋めないでほしいからね。

秀策 ……(略) ……お母さん……。学校は焼ける。お前はす

ねる。わしは、淋しい。相馬君がああ云ってくれなければ、

わしは焼け跡へ行つて首をくくるよ。(ぐつたりと椅子に

よる)

桃子 ……(略) ……さ、あなた、お父さん、そんなにお淋し

ければ、お墓へは一緒に行つてあげますよ。(夫の手を取

り、かすかに娘たちに笑ひかける)

登志子は、この場を見ていて、秀策と桃子が馬鹿馬鹿しく思えたのではなからうか。今、そんなことを云つてる時じゃないわよ、そういう気が、

登志子 (冷然と) さう……それでいいわ。

になつたのではなからうか。登志子の人物の小ささが見えてくる。それも岸田の計算であろう。感情的に冷たく突き放したようなせりふの言い方と間の置き方によつては、観客の笑いを誘

つて幕を切ることは可能である。喜劇らしい幕切れだろう。とすれば、それは岸田の計算通りであろう。

第三幕は、焼け跡の校舎の一部である。登志子は相馬に追い詰められる。この場の幕切れは、

登志子、思はず片手で顔を蔽つて、片手で相馬の肩に

取り纏る。相馬、彼女を完全に腕の中に抱く。

相馬 思ふとほりのことをちゃんといひなさい。

登志子 もうなんにもいはない。どうでもいいやうにしてち

やうだい。

幕

となつてゐる。相馬の意図通りの形になつた。ところで、この三幕の幕切れに至るまで相馬が登志子を追い詰めていく、その相馬と登志子のせりふの文体を、ここで少しばかり考えてみたい。たとえば以下のせりふのやり取りを例にとつてみる。

相馬 (そのへんを歩き廻りながら) 僕にはどうもよくわ

からんだ、女の自尊心つてやつが……。

登志子 だれのことをいつてらつしやるの。

相馬 結論はそこへ来る。僕は決して代償を求めてゐるん

ぢやない。いくらかあなたの役に立つといふことは、僕として、それだけで満足できる、といふ事実をあなたは忘れてゐる。

登志子 あたくしがもし、そのことを少しでも負担に感じるとしたら。負担に感じるといふのは、迷惑に思ふことぢやなくて、なんていつたらいいかしら、まあ、すまないといふ気持ちの強いのだわ。

相馬 だからですよ。さういふ気持ちの方があなたには負担なのだ。その負担を軽くしてあげられればありがたい。その方法は二つある。第一は、僕に、それをするのが当然だといふ資格を与へてもらふこと。第二は、それをするのがあなたのためであるよりも、むしろ僕自身のためだといふ名目がつけばいいんです。第一の方法は、説明のかぎりではない。第二の方法は、つまり、学校経営の実質的な責任を僕が負ふんです。利益が上がればその利益配当にちゃんと僕もあつかることにする。儲かる仕事にでなければ、金を出さないと僕が商人根性を、あなたが見届けさへすればいい。

登志子 そこまではつきりおつしやつていただけは、いくらか気が楽になるわ。

大袈裟に言う程でもない。これが戦前からの岸田独特の文体の一面であると云えよう。岸田のせりふは知的である、リリシズム溢れる初期の作品「チロルの秋」ですら、せりふの構成は知的である。その「チロルの秋」に比べると、「速水女塾」の筆者が例としてあげた部分などは「持つて廻った表現」という印象は拭えない。これは無謀な試みであるが、例えば三番目のせりふは、

相馬 あなたの役に立つというだけで満足している。

文意を伝えるだけなら、これでも済むのではないか。そしてその前の二つのせりふは不要である。以下、文意伝達だけの素っ気ないせりふを続けてみれば、

登志子 あなたに済まないという、わたしの気持ちが、わたしにとって負担なの。

相馬 その負担を軽くしてあげたい。方法は二つある。第一は、あなたの役に立つことをするのが当然といふ資格をもらうこと。第二は、学校経営でわたしが儲けさせてもら

うこと。

登志子 いくらか気が楽になつたわ。

ところが、この素っ気ないせりふ運びでは、以下のせりふは成
立にくい。

相馬 …(略)…日本の土を踏んでから、僕は、はじめて
あなたに、それとなく胸中を訴へたつもりです。あなたは、
実に巧妙に僕をあしらつた。かすかに希望を持たせながら、
拒みつづけるといふ、あのやり方だ。僕はかういふことに
は、あんまり意地づくになる方ぢやない。去る馬は追はず
といふ流儀なんだが、さて、あなただけは、このまま去ら
しめるといふことは、僕はどうあつても出来ない芸当だ。
なぜかといへばですよ……。

登志子 それはおつしやらなくてもわかつてますわ。こ
ちらにも、するぶん弱味あるつてことだわ。それをかくし
てはゐませんもの、あたくし……。

相馬 なるほどかくしはなさらんが……僕がそれに触れる
こと、僕がそれを確認することをおそれておいでだ。なに
よりも、その実体を僕は求めてゐるんです。それは誰のもの

でもない、僕のものなんだ。僕のものだといふ証拠が、
どうして僕につかめないんだらう。

この相馬の二つ目のせりふなどは、岸田独特の文体、スタイル
であり、岸田の言葉であり、他のことばには置き換えにくいの
ではないか。当然のことではあるが、岸田戯曲は岸田の文体で
成り立っている。話を本筋に戻す。

相馬は本気、本音で迫っていく。登志子は、辛うじて次のせり
ふでかわす。

登志子 お互いに年のせりとしておきませう。

相馬は追いかける。登志子は逃げる。登志子の自宅へどうぞと
いう言葉をとらえて相馬は、

相馬 僕をちゃんと正座に据えて、さあそこを動けるなら
動いてみるつていふやうなあなたの風を見ると、僕はいま
いましいんだ。

登志子 (歩きだしながら) 思つてることを、だんだん思つ
てるとほりにいへなくなるのはどういふわけせう。

相馬 僕に對して。

登志子 ええ……いいえ、誰に對してもよ、おそろく……。

相馬 さうかなあ。あなたはさうはみえないなあ。おそろしくほんとのことをいふときがある。

登志子は、「ええ……」と云いかけて慌てて「いいえ」と訂正する。そこへ、相馬は「おそろしくほんとのことをいふことがある」と決め付ける。この後岸田は、鮮やかな作劇のテクニクを見せてくれる。即ち、この相馬のせりふの直後、磯村甲吉を登場させる。磯村は、実にユニークな脇役である。岸田は、恐らくこの場面に使うために、磯村なる人物を創り出したのであろう。もともと板前だというフランス料理の先生である。理科実験室の地下室に住んでいる。字は読めないらしい。そのくせフランス料理のメニューはべらべらと読んで見せる。相馬と登志子が相談して、教師全員に辞表を出させた。磯村は、辞表か何か知らないけれど、首にしないという約束なら判を押すと云って判を押して提出した、と云ってあっけらかんとしている。登志子は、古い教師たちは首にしたが、「こんな面白い人物は残そう」と考えて首にしなかった。その磯村が出てきて、「そこにおいてなさるのは塾長さんぢやないかね」と呼びとめて、

相手の都合など全くお構いなく、べらべらと三分ばかり喋りまくる。警察に呼ばれたが、わたしの部屋から火を出したというのは事実無根である。警察は、わしが教師だといつてもなかなか信じない。小学校卒業後、バリの料理大学卒業だと言っておいた。そのうち警察も同情してくれた。失火の責任が学校にある場合、学校に對して損害賠償を要求するかと聞いた。わしは、しない、それどころか向こう一年間学校に對して俸給を辞退すると言った。警官たちは、わしの顔を見て一斉に襟を正すという風に見えた、などと傳々と喋る。

全く喜劇的人物である。この長ぜりふ、登志子も相馬もまともには聞いていないはずである。この長ぜりふの間に、次のような音響効果が入り始める。これも喜劇的效果がある。

この長広舌の間に、空の一角がにはかに曇りはしめる。月光が次第に鈍る。遠雷。時々、稲妻の閃き。雷鳴が近づく。最後に物凄いい落雷の音。

磯村甲吉は、飛びあがる。登志子と相馬を押しつけるやうにして、駆け出す。

客席は大笑いである。その後、

あとに残った二人は、一瞬、窓の外をみてる。

再び、耳をつんざく雷鳴。

登志子、思はず片手で顔を蔽って、片手で相馬の肩に取り纏る。相馬、彼女を完全に腕の中に抱く。

相馬 思ふとほりのことをちやんといいなさい。

登志子 もうなんにもいいはない。どうでもいいやうにしてちやうだい。

これは笑わずにはおれない。登志子の「もうなんにもいいはない。どうでもいいやうにしてちやうだい」という言葉は、雷鳴への恐怖から出た言葉とも取れる。登志子にとって不覚の一言というべきであろう。

第四幕。もう夏休み、連水登志子塾長で連水女塾はスタートしている。ここは、また、沼津海岸の連水女塾の寮。一週間ずつ交代で生徒達は宿泊している。

登志子と相馬の仲は、陰鬱であり、登志子は、この幕の間中、感情に激して、怒り、嘆き、泣く。そしてやがて淋しく微笑みつつ幕が降りる。

まず、幕開きからの登志子と相馬の立場、気持ちに触れて行

く。登志子は、この幕が開く前に、既に次のせりふのような事態に陥っている。また登志子から見た相馬は、

登志子 あたしは考へに考へた末、あなたになにもかもゆるしたのよ。それや、この年だから、いくらか功利的なところもあつたにちがひないけれど、それも、無分別といふ過ちを犯さない用心だつたの。あなたは、ただ、女としてのあたしを征服するだけでは満足できないひとなのね。ちかごろのあなたは、まるであたしを踊らせることに夢中ぢやないの。

これが、思文の、学校とうちの姉とどっちの方に興味を持っているのかという質問に答える相馬の口を借ると、こうなる。

相馬 (泰然と) 一にして二ならず、です。…(中略)…

お姉さん、八坂夫人の魅力は女学校長といふ肩書きで、実に生きて来た。珍しいことです。…(中略)…八坂婦人は、不思議なことに、「長」の字がつかないとまづい。会長、団長、社長、議長、市長、委員長、なんでもいい、ちよつとなにかを牛耳らせてみたい女性です。微妙な統率力、婉

曲な専制主義、まことに類のないモダン姐御だ。型破りの女学校にはもつてこいの校長さんです。

となる。終わりの方はかなり皮肉を込めた言い方ではなからうか。現にこの直後思文に、登志子に「僕のことをたづねられたら、もう名古屋へ発つたついでつてくれませんか」と云って、登志子から逃げ出そうとしている。そして、それより早く登場してきた登志子に見つかってしまった。

相馬、この間にそつと部屋を出て行かうとする。

登志子（それを見とがめて）相馬さん。

相馬（黙つて、立ちどまり、考へて、また立ち去らうとする）

登志子（更に強く）相馬さん。

紅林は、この気配のなにかたただならぬものを感じて、そのまま右手へ去る。

相馬（静かに登志子の方へ歩み寄り）僕、これから名古屋へ行くんだ。

登志子 名古屋へでもどこへでも行つたらいいわ。

相馬 だから行くよ。別に用事はないんだらう。

登志子 用事をなくしとくのよ。あなた、もう帰つて来ないんでせう？

相馬 帰つて来ないつていふのは、どういふ意味？

登志子 ゆうべあんな別れかたをして、あなた、それでもどうもないの。平気で名古屋へ行けるの？あたしは絶対にあなたの玩具にはならないことよ。

考えてみたら、この部分に、第四場の構図は圧縮された形で示されている。この構図が示す通りにドラマは進行し、幕切れを迎える。

そして、相馬は、この場が開く前に、既にこんな事態に直面していた。

相馬 ……（略）……僕はいま一つの岐路に立つてる。使へるだけの現金は、この寮の改築のために使ひ果たした。ほんといふとだよ、本校の復旧事は、まったく当てのない金をあてにして計画を立てたんだ。着手した以上、どうしてもいるだけの金は作らなくちゃならん。むろん、あちこちで工面はしたが、まともつたものは、どうしても出どころがないんだ。僕一人の力では、もう見透しがつかない。

そこへ現はれたのが、あの松沢のおやぢだ。いまだからはつきりいふけれども、実は、君のことはハルビン時代からうすうす知つてゐたらしい。一度会はせろといふんだ。まんさらでもない証拠だ。僕は、むろん、どんなことがあつても……。

更に続けて、

相馬 だからさ、松沢の方がダメなら、工事を今のところ
で打ち切るよりしやうがない。そこをどうするかつて岐路
だよ。

ここには、相馬の置かれている今の状況と、正直な気持ちが表示されているし、同時に登志子が、自ら拒否して、自分を引きずり下ろすための構図が示されている。

この作品を離れて、一般論として、もし、土壇場に追いこまれて、自分の力で生きていかなければならない女性がいたら、こんな場合、身体を張り、多少の危険は冒してでも、生きるために必要なものは、手に入れようとするのはないだろうか。それに比べてみれば、登志子の認識は甘いとしか云いようがない。

い。もちろん、登志子は自己の尊厳を傷つけられることを拒否して、松沢と会うという事態になることを拒んだ。岸田は、登志子にそういう生き方をさせた。そして、そういう生き方しか出来ない登志子を引きずり下ろした。それが喜劇の幕切れなのである。では、岸田は、泥まみれになつても強くしぶとく生きていく女性とはほど遠い、知識階級の女性の弱さを笑つたのであるうか。これは疑問である。

以下、幕切れに至るまでの、登志子と相馬の苦しみ、怒り、失望、逡巡、戸惑い等を辿つてみる。次は、登志子の、自己を見失つてしまつた悲痛な告白である。

登志子 あたしは、いま、自分つていふもんがわからなくな
りかけてゐるの。あなたにすべてをゆるした瞬間から、あ
たしは、ほんたうは、自分で自分を責めどほしなの。むろ
ん、夫のある身で、といふ、世間的な道徳の鞭も、感じる
ことは感じるわ。でも、それだけぢやない。あなたに対す
る気持が、まだはつきり割り切れてゐないからなの。どこ
まであなたを信じていいか、自分ながら、あやふやなの。
それが、なによりも苦しい。もう、あたし、なにをいひ出
すかわからないわ。いいこと……。あなたつていふひとは、

はじめてあたしをほんたうに幸福にしてくれるひとぢやないかと、思った。それはうそぢやない。あたししんから替ふわ。でも、でも、……あなたつていふひとは、あんまり、いろんなことを約束しすぎたの。あなたの真実は、そんな約束のなかにあるんぢやないと思ふんだけれども……さうすると、ふつと、あなたの正体がつかめなくなる……眼の前がまっ暗になる……どうしていいかわからない……。たつた今がさうなの……。深く身を引くなんていつてるあなた……あたしは、そのあなたを命がけで愛して、それでいいのかしら？ わからないわ、さつぱりわからないわ……。約束なんてどうだつていい。なんにもできなくなつていい。あたしを強く抱いて、いつまでもはなさないつていつてくれるあなたは、もうそこにはゐないぢやないの……。泣き崩れる)

全く悲痛な言葉である。ところが、岸田は、この悲痛なせりふに次のような喜劇的な音響効果を与えている。寮の食堂では生徒達の演芸会が始まつている。この登志子の長ぜりふの間は、生徒達の合唱の声がバックミュージックになつていて、登志子が泣き崩れた途端、拍手になる。このようにト書きが書かれて

いる。

食堂の合唱がやんで、ひとしきり拍手の音。

岸田の、登志子の気持ちへの評価が、この音響効果であらう。またこの後、相馬には、次のように云わせている

相馬 なにいつてるんだ、君は……。話の焦点がまるで狂つてるぢやないか。君はそこで怨みことをいつてるのか？ それとも、なにかを宣言してるのか？……(以下略)

この後、二人は、逡巡し、戸惑いつつ幕切れへ進んでいく。

相馬 さうか、そんなら、僕は永久に君の前から姿を消す。

登志子 (眼を伏せたまま、かすかに) なんて言つたの。

相馬 僕は、君と別れる決心をした。それがほんたうだと

思ふ。

登志子 (長い沈黙の後) さうね、ほんとかもしれないわ。

相馬 (穏やかに) 忘れてくれたまへ、すべて僕との間に

あつたことは……。

登志子 (きはめてしづかに) ええ、できたら、さうしたいわ。

相馬 学校との関係はなるべく無理のないやうに始末をつける。

登志子 はやく……いまのうちに、そうつと、出てつて……。

「古い玩具」(処女作) 以来の、岸田独特の、岸田の言葉を使えば「魂の韻律」(岸田国士「現代演劇論―舞台の言葉」白水社)を感じさせてくれるせりふ運びである。微妙な心理の揺れが表現されている。

この後、部屋から姿を消そうとした相馬、しばらく立ち止まり、躊躇った後に、後戻りしてくる。それを見た登志子は、

登志子 (おだやかに) なにしてるの。

相馬 (ややはなれたところで) 僕は、今言ったことを取り消してもいい。

登志子 ……………。

相馬 君が泥まみれになる気なら、僕は……。

登志子 (きつぱりと) 出て行つてちょうだい。

相馬 絶対に後悔はしないね。

登志子 (同じ調子で) 出てつてちょうだい。

相馬 (にやりと笑ふ) えらく強いんだね。しかし、云つ

とくが、君はよく考へてみたかい。君が僕に對してできたことを、ほかの男にでもできない法はないつてことをね。

登志子 (しばらく彼を凝視してゐるが、愕然として) あたしが……ううん、ちがふ……まるでちがふわ……(狂ほしく) 出てつて……出てつて……

相馬 出て行くさ。しかし、学校は。あのままでいいの。

この寮も、僕の会社の手で差し押さへるぜ。

登志子 どうでも勝手にするがいいさ。あたしは……あたし

は……あなたにもう、用はない。早く、出てつて……。

相馬 ……………。

登志子 (発ちあがり、地団太をふみながら) 出ていかない

の、あなた。

相馬、固い微笑を浮かべながら、前と同じ足どり(松尾注 「ゆつたりとした足どり」)で、部屋を出て行く。

く。

登志子 (椅子にぐつたりと寄りかかり) これで、もうなにもかもおしまひかしら……………。

この後は、前に「二一」「連水女塾」の喜劇の構図」に掲載しておいた幕切れのせりふになる。

それにしても、「にやりと笑ふ」というト書きで始まっている相馬のせりふは、強烈でときつい。「お前が、おれに対してできたことは、他の男にもできるな。今度は他の男を捕まえるのか」、登志子は、しばらく相馬の云った言葉の意味が分らなかった。分って愕然とし、激怒した。相馬は更に、「学校も寮も、おれの会社の手で差し押さえるぜ」と捨てせりふを残して姿を消した。これほど登志子にとって自己の人格の尊厳を傷つけられることばはない。前出の、どこからともなく聞こえて来る桃子や思文や月ノ木の励ましとも慰めともつかない声は、登志子に生きる力を与えるものではない。「淋しく微笑む」登志子の姿を残して、舞台は終わる。

相馬佐 持ち上げて引きずり下ろす、この人間像

① 相馬登場まで

第一幕は、状況を設定し、ドラマが歩き始める場と云えよう。相馬が登場するまでに、状況設定の大部分が終了し、その上、相馬登場の状況が整えられる。以下、その概略を述べる。

まず連水女塾という場つまり学校という場であるための生

徒、事務長（事務職員）、教頭（教師）を開幕直後に真っ先に登場させた。次にドラマの進行を担う連水秀策、桃子、思文、そして八坂登志子を登場させた。

これらの登場人物の口から、塾長の交代が進行しつつあることが語られる。その時代背景として、昭和二〇年の敗戦を機に社会全体に新旧交代の時期が来ていることが窺える。せりふとしてはそれほど数多くは語られないが、校内に「追放の桃」という落書きが書かれていることには、桃子塾長に公職追放乃至はそれに準ずる立場に追い込まれる恐れのあることが窺える。

新塾長になる予定の八坂登志子の経歴には、戦前、そして戦後の昭和二年・二二年・二三年という時代が色濃く陰を落している。登志子の夫直光（八坂男爵の令息）は戦前の満州国官吏であった。岸田は、その夫を満州に残して帰国したと書くが、おそらく戦犯としてソ連によってシベリアに抑留中のはずである。そして、登志子は子供をも満州に残して、単身、相馬佐に助けられつつ命からがら日本に引上げて来ている。

相馬登場の直前に、秀策、桃子、思文、そして登志子の口で語られる相馬なる人物像によって、観客はある種の先入観念を持って相馬の登場を待つことになる。当然岸田の作劇術である。まず秀策が、桃子の相馬に事務長をやってもらおうかという発

言を受けて、

秀策 さうさ、あれや、どうして、女学校の事務なんぞやらせる人物ぢやない。ハルビンでホテルのマネエジャアをしようとつたといふのは、これや、なんかの間違ひだ。まるで柄がちがふ。わしは、外務省にでもゐた男かと思つた。なかなか世間は識つとる。それでゐて、いつかう俗つばいところがない。たいしたもんだ。今にのすぞ、あの男は……。

また、登志子の「たつたひと言で、学校をやる興味を吹きこんでくれたんですわ」という発言を受けて、

秀策 だからさ、そこがああ男の「ただもん」でない証拠だ。……（以下略）

この秀策のことは、相馬という人間の一面が巧みに表現されている。なかなかの人物だ、ただもんでない、事業家として今に成功するだらうという、事業家という一面。それでいて、俗っぽいところがない、外務省の役人といった印象を与える男であるという。桃子が、その秀策のいう相馬の一面を角度を変えて

述べる、というより心配する。女の直感というべきか。

桃子 どつちにしても、相馬さんといふひとは、たしかに信用していいひとだらうね。あたしは、ああいふタイプのひとは、どうもよくわからないんだよ。なるほど、万事に抜け目はなささうだ。しかし、こつちが利用されるばかりぢや、なんにもならないからねえ。

端的に云えば、相馬への不信任である。見事に言い当てている。加えて思文が、

思文 その相馬さんなる人物さ、これや余計なことかも知れないけど、いつたいせんたい、あの人物は、ほんとはなんなの？……（以下略）

岸田は、老夫婦と思文にそれぞれの角度からの相馬観を語らせて、相馬という人物とこれから起こる悲劇（喜劇）の方向を示した。もう一人、登志子の発言に注目しなければならぬ。

登志子 ……（略）…あたしも詳しい経歴は知らないけれど、

兄さんともずつと悪意な間柄だし、世間的に相当な信用もあるらしくつて、日本へ帰つて来る早々、大きな会社を作つて事業をはじめらるるものです。ハルビンでの個人的な交際の範囲からみて、やつぱり教養のある紳士よ。ただ、うちの兄さんみたいに手堅くおんなじ職業を守り通すつていふたちぢやないのよ。気が向けばなんでもやつてみる。そのくせ、理想家肌の潔癖なところがあつて、損得をぬきにした社会事業なんかにも、をかしいくらゐ肩を入れるのよ。

教養のある紳士である、理想家肌の潔癖なところがある。相馬にしてみれば、これは立場上の必要に迫られての虚飾という一面でもあつただろう。秀策と思文が、相馬の別の危険性を指摘する。

秀策 … (前略) … なあ、登志子、あの男は、その方面の腕も相当とわしはにらんどるが、まさか思文のある直光君を裏切るやうな真似はすまい。

登志子は、

登志子 バカなことをおつしやるもんぢやありませんよ。此処をどこだと思つてらつしやるんです。汚はしいわ。

と一蹴するが、しかし、第三幕では、自ら「汚はしい」場、つまり相馬の腕の中に飛び込み、「汚はしい」という意識があるが故に、第四幕で、自ら破壊する。思文は、満州からの危険な帰国の道中、相馬が助けてくれた、登志子のことばを使えば、相馬は「命の親」だということに関して、

思文 だからさ、さういふ危険に対して、道づれになつた女性をあくまでもかばふなんてことは、男として、あたり前のことさ。姉さんが、そんなことのために、あのひとを必要以上に近づけるんだとしたら、それはをかしいつていふのさ。

と心配して云う。登志子は、ひとり生きていかねばならない切々たる心情を述べ、一方で思文のことばに感謝しつつ、「姉さんすこしは、これで、おとなのつもりよ」安心してほしい、と述べた。その瞬間を図つたように相馬が姿を現わす。岸田は、

このあたりどのように計算していたのか。また、登志子、思文、相馬を演じる俳優が、どのようにこのあたりの役を読み取り、どういう演技をして舞台を形象化するか、その前に演出がどう舞台を形象化しようとするのか、興味のあるところである。

② 相馬登場

相馬は、登場早々に知的側面、登志子のいう「教養ある紳士」の一面を見せる。思文に向かって「お姉さんを助けて学校経営に乗り出さないか、また、教壇に立ってもよいが」という誘いのことはを発し、思文は「人間相手の商売はまるで自信がない」と拒否して、さっさと退場してしまう。この退場自体、思文の意志表示であることは、観客と登志子には分る。相馬は登志子を相手に（岸田は、ここからしばらくはむしろ観客を相手に相馬像を見せる意図があったのではないか）。

相馬 人間相手でない商売なんて、なにがあるだらう？

登志子 学者にでもなる気でせう。

相馬 学問ですか？しかし、書物のなかに人間を読まずに、いったい、なにを読むんですか？これはまあ、さういつてみるだけの話で、人間に愛想をつかした人間の誠実さも、僕にはわかります。そこで、教育といふものがこれからど

う変つて行くか、これが問題だ。

と哲学的とも云える見識を見せる。その後続けて、

：（略）：さうしていらつしやれば、もう立派な校長さんだ。

と云う。このせりふを即座に受けた、登志子の次のせりふに今は、相馬をすっかり信頼し、頼り切っている姿勢がよく表れている。相馬の腕というべきか。

登志子 さう？なんですか、すこしづつ自信みたいなものがついて来ましたわ。あなたがついていふ方は、ほんとにひとを自惚れさせることがお上手ね。

③ 事業家相馬

続いて、相馬は事業家的側面を見せる。教師の整理に当たっては能力本位で考えよう。そして、授業の進め方にも、先生の先生でも授業中に「適当な詩的な文句を挟む」という噴飯物としか云いようなない提案をする。この提案は、岸田が相馬を対

象化して距離を置き喜劇的人物として書いたからなのだろうか。あるいは、岸田には大学教授の経験はあるが中等教育の教師の経験はないから、岸田自身大真面目でこう考えていたのか、判じかねる。校長の在り方についても提案する。装飾的価値が必要、「ちよつびり哲学を匂はせるなんていふことは時として必要です」という。「僕が先ほどやってみせましたように」というつもりで相馬は云っていると考えるのは皮肉過ぎるか。岸田はそういう計算では書いていないと思う。しかし、見ようによつてはそうも取れる。教頭は木原に代えて、僕の旧友を使おう、事務長も僕の子分を使おうという。第二幕では、ハルピンでの知り合い紅林高子を寮長に押し込み、第四幕では、柴山ふき子を職員として押し込む。いずれも観客から見れば正体不明の胡散臭い人物である。どさくさまぎれに自分の勢力を増やし、基盤を固めようとしていると映る。第二幕では、秀策と鏡子に向かつて、次のような提案をする。

相馬 さつくばらんにお話ししますと、学校経営の面であしのお手助けできることは、わたくしの工場がこの建物
(松尾注 沼津の夏季寮)を学校から半分借り受ける。製菓を中心とする小工場です。学校側は、むろん、残りの半

分を寮として使はれる一方、生徒を交替で工場労務の方へ提供して下さる。……(中略)……工場は一種の理科教室になります。同時に、生徒には適正な労働賃金を払ひます。学費にそれをあてれば十分余るくらゐだと思ひます。そして、もうひとつ、わたしのひそかに期待してゐることは、東京の本校へもある程度、作業をもち込む。(以下略)

生徒が学校内の工場で働いて給料をもらうこと、そして以下の省略部分にある生徒の労働提供の結果生じる金を学校の施設等の費用とすることが、教育法規上可能なか分らないが、この考え方は大正リベラリズムの中で生れた、例えば「勞作教育」などの思想と相通じるものがある。岸田の考え方であろう。

第二幕の中ほどでもまた事業家のセンスを見せる。そして、ここで問題になったことが、火災の復旧工事破綻の一因にもなる。岸田の作劇術である。相馬は平栗に質問する。

相馬 ……(略)……この建物は、抵当にはいつてやしませんか？

平栗 驚きました。凶星です。災は、無理をして銀行から、

少し融通してもらったんですが、それがそのままになつてをります。

相馬 いくら？

平栗 ええと、戦前の金にして、五万ばかり。利息は払つてある筈です。

相馬 土地ぐるみ？

平栗 さやう、わたしから申しあげたとは、どうか先生におつしやらないで……。

登志子 かまわないぢやないの。でも、はづかしいわね。

相馬 どうしまして……。事業家の不動産なら、それでなきやをかしいくらゐだ。

この直後、火災が発生する。みんなうろたえている中で、

桃子 ……(略)……保険もあいにく期限が切れてたんだとき。

相馬 いや、保険のことは、一度ご注意した筈ですが……。

悲劇が進行し始めた。第三幕、校舎の焼け跡。火災からの校舎復旧の資金繰りに相馬は奔走している。

相馬 ……(略)……今日は、ある人物に会つたんですが、こ

れが僕の非箱のひとつで、現金をしこたま抱へてる。好機逸すべからず。ちやんと話しをつけて来ました。

平栗 学校事業に投資するといふ人は珍しいですな。

相馬 学校へ出すんぢやない。僕に出すんだ。(以下略)

二人を決裂に追いこんだ松沢なる人物の話題の中への初登場である。この後、

④ 相馬迫る、本音を見せる

第二幕、火災以前

相馬 ……(略)……なにも、あぶなつかしいのは、あなたひ

とちぢやないんだ。僕も海千山千の男だし、あなたも十九の娘ぢやない。通じるものは通じてゐるわけなんだ。

相馬 さあ、どうすればいいか。胸に手をあてて考へる程の事でもない。

相馬 (椅子に登志子の方へ引きよせる) なるやうになるには、なるやうにするものがなければね。今日、帰りに熱海へ寄りませうか？

第三幕、幕切れ近く、

相馬 そこでどうですか、あなたのお氣持の軽くなつたと

ところで、あす熱海温泉を一晚つき合つてください。

登志子 強引ね。

相馬 満州引揚げの途中以来、ほんとに二人つきりになつ

たことはないぢやありませんか。あの長い不安な旅は、僕たちにとつてそれこそ運命を決すべき旅でした。機会はいくらでもあつた。ところが、僕の自尊心がその運命に従ふ

ことをゆるさなかつたんです。日本の土を踏んでから、僕は、はじめてあなたに、それとなく胸中を訴へたつもりです。あなたは、実に巧妙に僕をあしらつた。かすかに希望

を持たせながら、拒みつつけるといふ、あのやり方だ。僕はかういふことには、あんまり意地づくになる方ぢやない。

去るものは追はずといふ流儀なんだが、さて、あなただけはこのまま去らしめるといふことは、僕にはどうあつてもできない芸当だ。…(以下略)…

ここには、相馬の本音が窺える。打算と隣り合わせの愛情にならざるを得ない人間ではあるけれども本音である、と見るべき

であると思う。この後、第三幕の幕切れで、登志子は、相馬の腕の中に身を任せてしまふ。

⑤ 破綻、相馬去る

第四幕、相馬は名古屋に逃げ出そうとしている。

登志子 あなたはまるで無頼漢よ、ごろつきよ。

相馬 さうみるなら、みてもかまはない。

登志子 ううん、いままで、さうみえなかつたことが、あた

し、不思議なの。あたしは紳士としてのあなたしかしらなかつたわ。自由人つて、さういふものなの？それとは正反対なものぢやない？あんたはただ猫をかぶつてゐたのね。

相馬 それもゆうべ聞いた。僕はなんといはれてもこれだ

けの人間だ。…(以下略)…

第四幕つまり第三幕の幕切れで登志子が相馬の腕の中に身を任せてから、相馬の登志子に対する態度は高飛車になり、言葉遣いも「です、ます」といった丁寧語(敬語)を使わなくなつてゐる。まるで女房扱いである。ここには、相馬の登志子への意識の変化が窺える。岸田の相馬なる人物の描き方である。

相馬 ……(略) ……君を松沢に会わせようといふのは、ただ学校の復旧資金を……………。

……………(略)……………

登志子 ……(略) ……お金を出させるのに、あたりがやはらかい必要があるの？

相馬 あるさ。君には、それに類した経験がある筈だ。八坂君のトントン拍子の昇進の裏には、君の政治的手腕があったことは周知の事実だ。

これも相馬が登志子に近づいた理由である。もう一つの本音が窺える。登志子に愛情を持ったのは、むしろ後のこと、満州から引揚げ中のことと考えてもよいのではないか。

相馬 軍の参謀長が(松尾注、八坂直光の)吉林榮転に肩を入れたつていふのは？

登志子 あの人はずちへ前々からお酒を飲みに来て、勝手に、おれが引受けたつていつただけよ。

登志子と直光の所屬していた満州国官吏の周辺の社会は、こういうことが日常的に成り立つ社会なのである。相馬が接近を図

ろうとするのは、至極当然のことであった。

相馬 とにかく野暮なことをいはずに、あつさり会つたらいいぢやないか。自分の学校のことを相談するんだから、堂々とやつたら？

登志子 あなたの言ひ方が気に入らないの。いひ方ぢやないわ。そもそも考へ方だわ。あたしを見てゐるあなたの眼が、それでわかるんだもの。

相馬 ぢや、どうしても会はないね。

登志子 会ひません。

この時、食堂の方で、賑やかな拍手の音。

相馬 (起ちあがり) ぢや、仕方がない。僕は学校から手を引かうか？

登志子 (キツとなつて) 同時に、あたしからも？

相馬 お望みなら……………。

……………

相馬 うるさいなあ。

登志子 いいえ、話はちやんとつけませうよ。……………(中略)

……………あたしはどこが気に入らないのか、それもいつてもらふわ。できてもできなくても、わるいところはなほすわ。

あやまれといはれればいくらでもあやまる。

食堂の方で生徒たちの哄笑。盛んな拍手。

これでこの場面、二回の拍手は、登志子のせりふに贈っているような、つまりからかっているような効果を發揮する。三回目の拍手は、幕切れ近く、これは前述した。この後まだ登志子のせりふは続く。

でもねえ、あたしがちよつとなんかいつたからつて、学校から手を引こうか……そんな卑怯なおどかしかたつてないわ……。

結局、相馬と全く考え方が異なっている。すれ違っている。相馬には、本気で脅迫する気なんてなかったはずである。お互いに理解不可能なことが、次第にはっきりしてくる。相馬は三回目の拍手の後、

相馬 僕は、君と別れる決心をした。それがほんたうだと思ふ。

と、一度云っておきながら、逡巡する、迷う。

相馬 (ややはなれたところで) 僕は、今云つたことを取り消してもいい。

という。「ややはなれた」距離は、この場合絶対に必要である。

相馬 君が泥まみれになる気なら、僕は……。

二人は、相互に理解不可能なのである。相馬にとっては「最早これまで」である。出て行く決心をした。

相馬 絶対に後悔はしないわ。

このあと、先述した登美子の「出ていかないの、あんた!」という絶叫になる。そして、相馬は、「固い表情を浮かべながら」「ゆつたりとした足どりで」出て行く。

二人のドラマは、終わった。相互に相手が理解不可能な人間であることを、岸田ははっきりとさせた。しかし登志子にも相馬にも、自分にとって相手が理解不可能な人間だとは意識させ

ていない。

二―三 走り書き、他の登場人物の存在について

連水家の人間―連水桃子、秀策、思文、平栗高民（女塾の幹事

つまり事務長、連水家の執事）

連水女塾の教師―木原基（教頭）、小濱しゆん（家事）、落小路

常明（礼法、茶道）、磯村甲助（割烹）、月ノ木

直枝（音楽）、諸住泰介（数学、岸田は算数と

表記）向笠順三（国語と英語、岸田は国文と表

記）

連水女塾の事務員―橋爪愛作（用務員、岸田は小使と表記）、

紅林高子（沼津紅白寮の寮長）女事務員

連水女塾の生徒―A、B、C、D、E、その他おほぜい

古い時代に属する人間―連水桃子、秀策、磯村甲吉、（以下、

首になる人間）平栗高民、木原基、小濱しゆ

ん、落小路常明、

新しい時代の側の人間―連水思文、月ノ木直枝、諸住泰介、向

笠順三

相馬佐と満州国で知合いの胡散臭い人間―紅林高子、柴山ふき

子（紅林の旧友、ブローカー）

一幕と三幕の幕を切る役割の点景的人物―磯村甲助

状況設定の一端を荷担し、雰囲気を作る効果を担っている人物

―おほぜいの生徒たち

三 「連水女塾」の岸田の喜劇、終わりに

推測ではあるが、岸田は「連水女塾」に必ずしも満足しては
いなかったのではなからうか。それが、「女人渴仰」「権茸と雄
弁」「道遠からん」等の作品での喜劇の方法の転換につながっ
ていったのではなからうか。

その理由として、人間像形成の不徹底さをあげることはどう
であろうか。「連水女塾」の場合、岸田は昭和二〇年、二二年、
二三年、二三年ごろの日本の置かれている状況に、その状況で
の人間像形成のリアリティーに、拘ろうとしているようだ。し
かしそれは、必ずしも現実を透徹した目で見据えたものとは云
い難いのではなからうか。

まず、なぜ八坂登志子でなければならなかったのか。戦前の
満州国官吏八坂男爵の子息八坂直光の令夫人という特権階層の
人間を舞台に引きずり出した岸田の意図は推測出来そうな気が
する。しかし一方では、なぜ八坂登志子でなければならなかつ

たのか疑問でもある。

二一年には、極東国際軍事裁判が始まっていた。軍国日本の土台は、占領軍によって徹底的に破壊されようとしていた。旧体制側にいた人間の公職追放も始まっていた。本論冒頭で述べた、岸田が大政翼賛会文化部長の職に就いていた、あの軍国主義体制は日本国民にとって悪い体制であった。それが破壊されようとしていたのである。当時を生きていた我々日本人にとっては、国家、社会の民主化への道は正しいものであったし、軍国主義体制は悪であった、糾弾されなければならないものであった。

岸田が八坂登志子をドラマの主人公に選んだ、その時代背景として、当時のこういう社会状況があった。だが、岸田がその状況の中で生きている八坂登志子の中から引き出したものは、育ちの良さによるものなのか、認識の甘さ、人の良さ、理想主義的側面といったものである。一時は相馬に迫られ、迷わされて、情に駆られて、抑留中の夫直光や満州に残して来た子供のこととも一瞬忘れて、相馬に身を任せてしまったが、これでよいのかと迷い、自分を責めて、つまり人間の弱さを曝け出し、相馬に資金繰りのため女であるお前が松沢に会え、と迫られて、激情に駆られて激しく拒否してしまう。それで相馬は去って行

った。泥まみれになっても今を逆しく生き抜く庶民の女性像を、登志子に求むべくもない。登志子は、自らの手によって、築き上げようとしていた自分の生活を閉ざしてしまった。自ら荷担して自らを引きずり下ろしたのである。そして、桃子にも思文にも月ノ木にも、その登志子を励まし、助けるに十分な力を岸田は与えてはいない。岸田は、軍国主義日本の時代の特権階層の一員であった登志子を責めようとはしなかった。それが岸田の積極的な意図だったのかも知れない。しかし、そうだとすれば、八坂登志子でなければならない積極的な理由はない。

登志子と対置される、もう一人の主人公、相馬佐はどうか。登志子を持ち上げ、引きずり下ろす役割を背負って登場して来るが、悪人に敵することは出来なかった。登志子に愛情を抱き、過酷な環境の中必死になって登志子の満州からの引揚げを助けたのは、事実である。一方で過去に、打算づくで八坂直光、登志子夫妻の風する特権階層に近づいていたのも事実である。儲けと登志子の身体とを手に入れるために、連水女塾の経営に参画するのはよい。悪人ならこんな場合、当然採る手である。また、手に入れたはずの登志子の扱いに手を焼き、学校の火災の後、「まつたく当てるの金をあてにして計画を立て」校舎復興資金の調達に困って、登志子を、色仕掛けて松沢なる人物に

会わせようとすること、これはまだよいとしても、その登志子の扱いに手を焼き、登志子に激しく拒否されただけで、計算づくではあるが逃げ出してしまふなどというのは、徹底した悪人のやることではない。尤も悪人は掃いて捨てるほどいるが、徹底した悪人など、現実には希少である。現実には拘るならば、相馬はそこらに居そうな人間である。

登志子にしろ、相馬にしろ、お互いに相手の考えていること、生き方、感情といったものが理解出来ない人間である。自分の思いにだけ拘る人間である。しかも、登志子も相馬も、相手の考えていること、生き方、感情といったものが理解できない、そして相互に相手を理解することが不可能な人間なのだと、岸田は、本人たちに意識させてはいない。岸田の書き方である。二〇世紀の抱え込んだ人間不信という大きいテーマの近くまでは来ておりながら、勿論、「人間不信」は岸田のテーマではなかったし、岸田はそこまでは当然踏みこみはしなかった。何れにしても、岸田は、実際今生きている人間、実存する人間のリアリティーに拘りすぎたのではないか。

井上ひさしが、喜劇論の中で、モリエールに言及して、「モリエールのすこいところは、人物の彫りを深くして、類型から抜け出したことです。類型の中に人間の感情を溢れるように盛

り込んだという言い方もできるかもしれない。さらに、時代の風俗や浅幕な流行を鋭く観察して、その欠陥を登場人物の姿の上に映し出して批判し、笑いのめす」と云っている。そういう喜劇には、「連水女塾」はならなかった。岸田が、この「連水女塾」を書いた翌年の「女人渴仰」から、喜劇の方法の転換を図ろうとしたのも肯ける。

参考文献

- | | | |
|-----------------|-------|------------|
| 連水女塾 | 中央公論社 | 昭和二三年刊 |
| 道遠からん | 創元社 | 昭和二五年刊 |
| 岸田国士全集 | 新潮社 | 昭和二九年刊 |
| 現代演劇論 岸田国士著 | 白水社 | 昭和二五年刊 |
| 岸田国士論 渡辺一民著 | 岩波書店 | 昭和五七年刊 |
| コメディ・レッスン 井上ひさし | | 雑誌「せりふの時代」 |
| 一九九九年夏号 | 小学館 | |